

3. 各事業について

3. 各事業について

1) 事業1 ふれあい自然体験活動

小学生班に9名、中学生班に10名の大学生が参加した。小学生班では班付リーダーとして、活動をリードする高校生をサポートしたり、子どものケアをした。中学生班では資材を運んだり、会場を整備するスタッフとしての役割を果たした。

A) 小学生班

1日目 7月28日(土)

<ゲーム>

ソング・ゲームタイム

バスの中で、高校生リーダーを支援して子どもと一緒に歌を歌ったりゲームをした。

自己紹介ゲーム

ゲームをしながら、自然な形で自己紹介をすることができた。

<班旗作成>

班毎に案を出し合いながら、自分たちの班旗を作る支援をした。

<イブニングタイム>

<KYT>

危険予知訓練のことで、絵を見て危険なところを探す支援をした。

<班会議>

1日の反省をし、明日の目標を決めた。

<本部会議>

スタッフ、高校生リーダー、大学生リーダーが集まって1日の反省をした。

2日目 7月29日(日)

<子ども会でできること>

社会人スタッフから、子ども会の活動と意義について講義があった。

<ネイチャ・ゲーム>

<キャンプファイヤー準備>

歌やおどりの練習、トーチ棒作り、座布団作り、スタンツ(出し物)を班毎に決め、その練習をした。

<結果がでました>

子どものアンケートのまとめの発表があった。

3日目 7月30日(月)

<別れのつどい>

学生の工夫した点

- 高校生リーダーの立場を考えて控えめに行動した。
- スタンツを考える時、みんなで考えられるように指導した。
- 楽しくなさそうにしている子がいたので、楽しめるように積極的に話しかけたり、友達ができるようにした。



小学生班 行きのバスの中で子どもたちと



風船でいろいろな動物を作ることに挑戦

- バスの中の雰囲気良くなるように大きな声で歌った。
- 初対面でなかなかうちとけられない子どもたちがうちとけるように「うで相撲」をやったりした。
最初は自分が子どもたち一人一人と対戦しながら次第に全員を巻き込んで、班全体の雰囲気づくりができたと思う。
- 班のなかにどうしても輪の中に入れない子がいたが、その子のとなりに居て輪の中に入れるように気を配ったり、話し掛けたりしてひとりにさせないようにした。

学生の感想のまとめ（小学生班）

このフレンドシップ事業に先立って、まず言えるのが、この活動に参加した大学生のほとんどが子どもたちと接するような経験をあまりしたことがなく、不安にかられていたことである。岩手へ行って私達は一体何をすればよいのか、高学年と呼ばれる5、6年生にはどのように接すればいいのか、高校生リーダーとはうまくやっていけるか、などと多くの不安が一人一人に重くのしかかっていた。しかし、「子ども達の間離れ」が進みつつある中で、この企画は子どもたちだけでなく、大学生である私達にも貴重な体験になることは確かである。私達はこの企画を通して、子ども達に協力や友情、他の人と触れ合うことの大切さといった多くのことを学んでほしいと期待していた。そして、子ども達にそのように感じてもらうには、じぶんたちが班付きリーダーとしてどのように機能すればいいのかなど、各人の役割を確認しあってこの活動へ参加した。

この事業における私達の活動は、月に一回行われていたスタッフだけのミーティングである。ここでは、去年の様子や今年の企画書などを通して、岩手山の研修会がどのようなものであるかということを知ると同時に、心の準備を整えることができた。また、このミーティングに参加することで、子ども会研修会を開催するまでの、裏での先生方の仕事や進め方を見ることができた。子ども達ははじめから立てられた計画に沿って活動するだけであるが、その裏では、スタッフの先生方によるプログラム作りやプログラムの練り直し、ミーティングの場所の確保など、やらなければならないことが山ほどあった。先生方は月に一回忙しい合間を縫って集まり、それぞれの意見を出し合いながら計画を立てていた。そのような様子を見て、はじめて指導者というものの役割や立場がわかった。ただ、私達は途中からこのミーティングに参加したため、何がなんだか分からないといった状態で、あまり話し合いに参加できなかったのが残念であった。学生の中からは、「どうせやるならプログラムを作る最初の段階から参加したかった」という感想も出た。

実際の活動はというと、9人全員が共通して「参加してよかった」「多くのことを学んだ」という感想を持った。はじめは私達自身、班付きリーダーという役割に戸惑い、子ども達も慣れていなかったため、互いに緊張していて不安が一気に大きくなったりもした。しかし、大学生である私達が緊張してしまえば子ども達も緊張してしまう。私達は、自分達の殻を破り自らをさらけ出し、話をしたり歌ったり、踊りを教えたり、注意したりということを通して少しずつ子ども達へと働きかけていった。そのように子ども達に接していく中で、子ども達からも笑顔が溢れ、打ち溶け合っていくことができたと感じる。5、6年という学年はしっかりしている部分もあるし、手伝ってあげないといけないこともある。私達は班付きリーダーとして、手を貸してあげるところと自由にさせるところを自分達で判断しながら、子ども達と接することができた。

3日間という短い間ながらも子ども達と一緒に過ごしたことによって、今の子ども達がどのような傾向にあるのか、漠然とだが掴むことができた。それよりも子ども達と関わることに自信を持ち、そして教師になりたいと思う気持ちが大きくなった人がほとんどであった。また、スタッフの先生方は現職の教員が多く、そのような先生方や色々な人達と話せたことも貴重な体験であった。大学の講義では学べないことを多く手に入れることができた3日間であった。

B) 中学生班

1日目 7月28日(土)

<ゲーム>

自己紹介ゲーム

輪になり、1人ずつ前を出て名前を言いながら簡単なポーズをした。全員がそのポーズをまね、前に出た人の名前を復唱した。

伝言ゲーム

前にいる人の背中に漢字一文字を書いて伝えていくゲームをした。学生が工夫した。

<班旗作り>

主に用具の配布や班の子どもの様子を見守る役割をした。

<ネームプレート作り>

木材にやすりをかけて表面を磨き、マジックで自分の名前を書いたり好きな模様を書く支援を行った。主に用具の配布やワニ口クリップと木材をくっつける役目であった。

<ソング>

2つのパートに分かれて、歌「記念樹」を子どもとともに練習した。

<ナイトウォーク>

道のあちこちにおばけ役として待機して、中学生を驚かす役と、ゴールで待機し、道の途中で中学生が解いているクイズの解答とおやつを渡す役の二手に分かれた。

<結果ができました>



中学生班 こどもたちと一緒に

2日目 7月29日(日)

村民体育大会(班別対抗運動会)

大学生は用具設置や片付け、競技のデモンストレーションをする。

プログラム

開会式

ラジオ体操

人借り競争

デカパンリレー

デカパンに入って走るリレー

単語作り競争

君もキャタピラー

ダンボールで作ったキャタピラーに入
て前に進み、速さを競うもの

早いもん勝ち

6本の綱を中央に置き、どちらの班が多
く取れるかを競うもの

靴飛ばし

長さに挑戦

班のみんなの着ているものをつなげてい
き、長さを競うもの

x人y脚競争

閉会式



キャンプファイヤ 大学生の主張

キャンプファイヤー準備 歌とダンスの練習

キャンプファイヤー ストーリー仕立てになっている。大学生は女神とそのお供の役目。
最後のほうで歌とダンスを披露し、大学生の主張をする。

3日目 7月30日(月)

名刺作り 用具の配布、各班を見回る役目。

大学生スタッフとして工夫したこと

(1日目)

*ネームプレートのボンドづけの時、ウォームガンを使ったが、よほど生徒が怖がらない限り自分でやるように指導した。

*歌の練習の時、歌いやすいように間に積極的に入っていった。

*村旗作りの時、各班をまわって、アイデアがわからない班にはヒントを与えたり、アドバイスをしたりした。

(2日目)

*自分たちも運動会の競技に参加した。

*競技をしている生徒の応援をして、運動会を盛り上げるようにした。

*後片付けに積極的に参加し、次のプログラムに移りやすいようにした。

(3日目)

*帰りのバスを盛り上げるように手伝いをした。

*朝の掃除を進めるため、一緒に掃除を行った。

*荷造りの時に声かけをして、スムーズにことが運ぶようにした。

(全体を通して)

中学生がなかなかやらないこと(やりにくいこと)を大学生が代わってやってやるのではなく、中学生が自分自身でできるように後押しをするような形をとった。

学生の感想のまとめ(中学生班 抜粋)

今回のこの活動を通じて感じたことは、まず、僕たち大学生も準備段階の話し合いから参加させて頂いたので、本当に手作りの活動であるということがわかりました。この会議では、最初のうちは、やはり勝手がわからずどの様に話していけば良いかわからずに、あまり発言することができなかった様に思いました。しかし、回を重ねていくうちに先生方との話し合いにも入っていきえるようになったので良かったと思いました。また、これによって先生方の気心が知れるとまではいなくても、どんな性格なのかは把握できたので、実習にすんなりと入っていくことができたし、先生方を信頼して活動することができたので良かったと思いました。

一方、実習自体からは大変多くのことを学ぶことができたと思っています。実習初日は子ども達とうまくコミュニケーションを取れないままに終わってしまったので、2日目以降は、自分から積極的に話しかけたりしてみることにしました。そしたら、素直に反応してくる子もいるし、なかなか喋ってくれない子もいるし、本当に人によって様々だなと実感しました。また、今回は子ども達の中に入って一緒に活動するのではなく、外から一歩引いた感じで子ども達を見ていたので、子ども達の行動をじっくり見てみると、リーダーシップをとっている子、誰とでも気さくに話す子、どの活動でも積極的に活動している子、その他にも本当に子ども達の色々な面が見られたと思います。これは、子ども達の中に入って活動していると見えづらい部分かもしれないと思うので、貴重な経験ができたと思います。

3日間という本当に短い間しか子ども達と接する機会がなかったけれど、「こう話したら子ども達に届くな」とか「こういう風に接したらダメだな」ということが実際体験してみてわかりました。このような経験を教育実習前にできたということはとても大きなことだと思います。これから教師を目指す上でこの経験は必ず活かされると思うので、ここで学んだことを忘れずに勉強していかなくてはならないと思いました。

この岩手山の研修では子ども達と触れ合うだけでなく、様々な社会人の人達や教員の人達とも接することができ、自分の今まで知らなかったことや仕事に対しての大変さ、大人としての考え方など多くの知識を得ることができたこともとても良い経験になったと思うしこれからの自分の人生の中で活かしていけたらと思う。

僕達のような子ども会のメンバーではない人達が入ることによって高校生リーダー達の仕事を奪うようなかたちになってしまったことは今回とても良くないと思ったし、それに我慢していた高校生達にとっても申し訳なく感じた。全ての高校生がそのように思っていたかはわからないが、必ず何人かはせっかく楽しみにしていたのに自分の力を全て発揮できなかったと思う。このように考えると大学生がこのような子ども会の研修に授業の一環として参加することは来年からは止めるべきだと自分は考えるとともに、このような経験は大切なことなので大学でこのような研修を企画して子ども達を集めて行うような仕組みを作ってみてはどうかと思う。

自分は「先生」と「生徒」という立場にこだわりすぎていたことを反省した。大学生という曖昧な立場だからこそ「先生」の考え方も「生徒」の言い分もわかるのかもしれないと感じた。

とても濃い3日間だったと思う。中学生と触れ合うことはとても楽しいし、やはり教師になりたいと再確認もできた。それと同時に、自主的に動くことの大切さ、そして難しさを実感した。また、大きな課題として自分が「話し掛けやすい子」ばかりに話し掛けてしまうことも発見した。無意識のうちに自分にとって「得意な子」、「苦手な子」を作ってしまうことに繋がりがねない。このことに注意して今後もこのような活動に積極的に参加していきたい。

全体的に見て高校生リーダーはとても良くがんばったと思いますが、まったく問題が無かったというわけでもないと思います。行き帰りのバスの中で、車酔いかひどいので薬を飲んで休んでいた子を無理に起こして歌わせたり、就寝時間の見回りで、まだ寝る準備ができていない子がいても関係なく電気を消してしまったりと少し行き過ぎな面も見られました。みんながみんな同じでは無いのだから（中には休みたかった子もいたようです）何分か続けて歌の練習をしたらしばらく休憩をとるとか、せめて身の回りのものを片付ける数分間くらいは消灯を待ってあげるといった配慮が必要だったのではないかと思います。引率の大人の方とも高校生リーダーとも違う位置にいるからこそ見えること、できたことがもっとたくさんあったように思いました。

バスに乗ってからは、高校生のパワーに圧倒されてしまい、ついていくのに精一杯でせっかくのチャンスに中学生と触れ合うことはできませんでした。バスの座る席も失敗したなど今になって後悔しています。

また、夜の会議では、この合宿のことに限らず現場である学校のことや、学生時代に学んでおくべきことなど色々なことについて現職の先生方からお話を頂けたことは大変貴重な経験となりました。

「学生達だけでやっていけばいい」というように一步後ろへ下がるのではなく、本当に子どもの心を知りたい、レクリエーションがどのようなものであるか、その意味と楽しさを理解したいと思うなら子ども達の中へ自ら進んで入っていくという姿勢を持つことは必要だと思いました。

大学生スタッフ全体がてきぱき動けず、時間にルーズだった。また、大学生でかたまってしまって、子どもに接していない場面がいくつかあった。これは、自分が何のために研修会に参加したのかということを考えれば、反省すべき点であると思う。また、子どもの行動が良いときも、悪いときも声をかけるべきだったと思う。

子ども達には楽しんでほしかったし、仲の良い友達もたくさん作ってほしかったので、子どもと子どもの中に立って、話を積極的にできたと自分では思っています。また、初日と比べ3日目では子ども達同士の仲の良さみたいなものが強まっているような気がして嬉しくなりました。

